召天者記念礼拝説教（2026 年 11 月 1 日）

説教者：中村信哉

わたしとともにパラダイスに

ルカの福音書 23 章 39-43 節

はじめに

今日は、「召天者記念礼拝」です。この礼拝は、先に天に召された方々を覚えると同時に、私たちもいつか必ず迎える「死」という現実を見つめる時でもあります。先に天に召された方々は、私たちより先に「死」を経験し、天に旅立って行かれました。

今日の聖書箇所には、あと数時間で「死」を迎えるという三人の人の対話が書かれています。一人はイエス様で、あとの二人は、イエス様とともに十字架に架けられた**「犯罪人」**の二人です。キリスト教では、イエス様の十字架を大切にし、教会堂や礼拝堂に十字架を掲げます。しかし、それはいつも一本の十字架です。それゆえに私たちは、イエス様が十字架に架けられた「ゴルゴタ」という場所には、イエス様の十字架だけが立っているように連想するかもしれません。しかし現実には、「ゴルゴタ」という場所には三本の十字架が立っていたのです。イエス様の十字架と二人の犯罪人の十字架です。

十字架は、ローマの処刑方法で、あまりにも残忍な処刑方法であったので、詳しい資料はあまり残されていないそうです。分かることは、十字に組み合わされた木に、両手・両足に釘を打たれて張り付けにされ、長時間、激しい苦痛に耐えながら死を迎えるというものです。十字架刑は、極刑であったので、限られた人にしか執行されなかったそうです。強盗、殺人、あるいはローマ帝国に反乱を起こした人などが十字架に架けられました。しかもローマの市民権を持つ人の多くは、十字架刑を免れたそうです。伝説では、使徒ペテロは逆さ十字架に架けられて殉教したと言われますがが、使徒パウロは首を切り落とされて殉教したと言われます。それはおそらくパウロは、ローマの市民権を持っていたからだと思われます。

イエス様とともに十字架に架けられた二人の犯罪人は、**「強盗」**であったと他の福音書に書かれています（マルコ 15：27）。彼らは、暴力を用いて金品を奪い、おそらく人を死にまで至らせたのでしょう。イエス様は、彼らの真ん中で十字架に架けられ、彼らはイエス様の右と左に十字架に架けられました。イエス様はまるで「強盗」の一人、「犯罪人」の一人であるかのように、十字架に架けられたのです（イザヤ 53：12）。この三人は、十字架の上で激しい苦痛に耐えながら、残されたわずかな時間の中で、互いに言葉を交わすのです。

1. 犯罪人の一人

39 節には、一人の犯罪人の言葉が書かれています。**「十字架にかけられていた犯罪人の一人は、イエスをののしり、『おまえはキリストではないか。自分とおれたちを救え』と言った」**。伝説では、このイエス様をののしる犯罪人は、イエス様の左側の十字架に架けられた犯罪人で、名前を

「ゲスタス」と言ったそうです。彼は、イエス様を罵倒して、「おまえが本当にキリストなら、自分と俺たちを救ってみろ」と言います。この言葉は、イエス様の十字架の周りで、ユダヤ人の**「議員たち」**やローマの**「兵士たち」**が語っていた言葉です。彼らはイエス様をあざ笑い、こう言いました。**「あれは他人を救った。もし神のキリストで、選ばれた者なら、自分を救ったらよい」(ルカ 23:35)「おまえがユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ」(ルカ 23:37)**。彼らの嘲りに共通していることは、「自分を救え」という言葉です。イエス様をののしる犯罪人ゲスタスも、彼らと同じように、イエス様に「自分を救え」と語るのです。彼は、周りの人の声に同調しているだけです。周りの人がイエス様を見るその同じ見方で、イエス様を見ているに過ぎません。イエスという人が、一体どういう方なのか、なぜ十字架に架けられているのかを真剣に考えようとしません。イエスという方に向き合おうとせず、ただ世間のイエス様に対する評価に流されているだけです。これは、彼だけの問題ではありません。多くの現代人も、また多くの日本人も、彼のように大きな犯罪を犯さなかったとしても、イエスという方と真剣に向き合おうとはしません。世間のイエス様に対する評価にただ何となく同調して、死を迎えていく、その意味においては、彼と共通するものがあるのではないでしょうか。

2. <u>もう一人の犯罪人</u>

イエス様は、彼に対して一言も語りません。イエス様は、あらゆるののしりに対して、ただ黙っておられるのです（イザヤ 53：7)。しかし彼に対して、口を開いた人がいます。それが、イエス様の右側に架けられた、もう一人の犯罪人です。彼の名前は、伝説では「ディスマス」と言われます。「ディスマス」は、イエス様を間に挟みながら、イエス様をののしる「ゲスタス」をたしなめてこう言うのです。**「おまえは神を恐れないのか。おまえは同じ刑罰を受けているではないか。おれたちは、自分のしたことの報いを受けているのだから当たり前だ。だがこの方は、悪いことを何もしていない」**。彼は、イエス様をののしる「ゲスタス」を叱りつけるのです。

しかしマタイ 27：44 を見ると、**「イエスと一緒に十字架につけられた強盗たちも、同じようにイエスをののしった」**とあります。彼もまた、最初は「ゲスタス」と一緒に、イエス様をののしっていたようなのです。イエス様が十字架に架けられたのは、午前９時から午後３時までの６時間です。この６時間の間に、彼はイエス様をののしる人から、イエス様をののしる「ゲスタス」を叱りつける人へと変わったのです。彼は、この 6 時間の間に、自分のすぐ隣で十字架に架けられているイエス様の見方が変わっていったのだと思います。どんなにののしられても、決してののしり返したり、自分の正しさを主張して、不当な裁判だと訴えることもせず、むしろ**「父よ、彼らをお赦しください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです」(ルカ 23:34)**と、人々のために神様にとりなし、彼らの赦しを求めていたのです。しかも、この人は神様を「父」と呼んで祈っている、その姿を見て彼の中で少しずつ何かが変わり始めたのではないかと思うのです。あのポンテオ・ピラトも**「彼には、死に値する罪が何も見つからなかった」**と言ったあの言葉は、本当かもしれない、そうであるならば、

この「ゴルゴタ」に立っている三本の十字架のうち、真ん中の十字架は、左右の自分たちの十字架とは全く意味が違うものであると気づき始めるのです。左右の十字架は、「自分のしたことの報いを受けている」という罪を犯した者に対する刑罰の十字架です。罪に対する当然の報いとしての十字架です。しかし真ん中の十字架は違うのです。真ん中の十字架は、罪を犯した者に対する刑罰の十字架ではないのです。なぜなら「この方は、悪いことを何もしていない」からです。彼がどこまでイエス様のことを分かっていたのかは分かりません。私たちは、イエス様の十字架の死の意味は、私たち人間の罪を償うための身代わりの死であること、そのために犯罪人の一人のように、強盗の一人のようになって十字架に架けられたことを、私たちは聖書全体を通して知っています。しかし彼はおそらく、そこまでイエス様の十字架の死の意味を理解していなかったでしょう。しかし少なくとも彼は、「おまえは神を恐れないのか」と言っているように、イエス様を「神の子」と信じるようになっていたのではないでしょうか。また、ののしられてもののしり返さず、人々の罪の赦しを願うこの方は、「悪いことを何もしていない」、つまり「罪のない方」だと信じるようになっていたのではないでしょうか。

彼はついに、イエス様に対して言葉をかけます。**「イエス様。あなたが御国に入られるときには、私を思い出してください」**。ここでも彼の信仰を見ることができます。彼は、イエス様が「御国に入られる」方であると信じているのです。ここでの「御国」というのは、「王国」という意味です。他の聖書の翻訳では、「御国の権威をもっておいでになるとき」「御国の位におつきになるとき」と訳しています。つまり彼は、イエス様こそ「神の国の王」となる方、やがて世の終わりに、「神の国」を携えて王として、この地上に来られる方と信じているのです。しかし彼は、「私を神の国に入れてください」とか、「ゲスタス」のように「私を救え」とも言わないのです。ただ「私を思い出してください」とだけ言うのです。彼は、自分は救われなくて当然だと思っているのです。自分が犯した罪の大きさを深く自覚しているのです。自分は、自分の犯した罪の報いを受けて、ただ死んでいくのだと思っているのです。自分は死んだ後、どこに行くのかは分からない、しかしこの方は違う、この方は死んだ後、「神の国の王」となって、やがてこの地上に来られて、最後の審判をなさる方だと信じているのです。その時に、一緒に十字架に架けられた犯罪人がいた、そのことを少しでも覚えていてくれたら、それでいい、それだけで幸せだ、それだけでこの十字架の苦痛に耐え抜き、安らかに死を迎えることができると思ったのです。

3. <u>イエス</u>

では、イエス様は、そんな彼に対して、どんな言葉をかけるのでしょうか。イエス様はこう言われます。**「まことに、あなたに言います。あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます」**。彼は、自分は、自分の犯した罪の報いを受けて、ただ死んでいくのだと思っていたのです。そして、自分が死んだ後、どこに行くのかも分からない、ただいつか遠い将来、イエス様が「神の国の王」として、この地上に来られて、最後の審判をなさる時、少しでも自分のこと

を覚えていてくれれば、それでいいと思っていたのです。しかしイエス様は、今日、彼がどこにいるのかを語られるのです。数時間後、死を迎えた後、彼がどこにいるのかを語られるのです。彼は、イエス様とともに「パラダイス」にいると言われるのです。

「パラダイス」という言葉は、今日の聖書箇所以外に、新約聖書では二回しか出てきません。そこは**「第三の点」(IIコリント 12:1-4)**と呼ばれていたり、**「いのちの木」(黙示録 2:7)**がある所と言われたりしています。しかし、「パラダイス」とは具体的にどういう所なのかは、よく分かりません。ただはっきりしていることは、イエス様とともにいる所です。イエス様とともにいる所、それが「パラダイス」なのです。

私たちは、死んだ後、どこに行くのでしょうか。それは「天国」だとか「パラダイス」だとか言うことはできるでしょう。しかし大切なのは、死んだ後、イエス様とともにいるかどうかなのだと思います。パウロはこう言いました。**「私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです」(ピリピ 1:23)**。パウロにとって、「世を去る」、つまり死ぬことは、イエス様とともにいることなのです。誤解を恐れずに言えば、イエス様とともにいる所が「天国」であり、イエス様とともにいる所が「パラダイス」なのだと思うのです。

<u>おわりに</u>

私たちは、誰もが必ず死を迎えます。今日の聖書箇所には、死を前にした対照的な二人が出てきました。イエス様の左側の十字架に架けられた犯罪人の「ゲスタス」の最後の言葉は、「おまえはキリストではないか。自分とおれたちを救え」という、イエス様に対するののしりの言葉でした。もう一人のイエス様の右側の十字架に架けられた犯罪人の「ディスマス」の最後の言葉は、「イエス様。あなたが御国に入られるときには、私を思い出してください」という、イエス様に対する祈りの言葉でした。私たちは、生涯の最後にどんな言葉を語るでしょうか。特にイエス様に対して、どんな言葉を語るでしょうか。ののしりの言葉でしょうか。それとも祈りの言葉でしょうか。十字架に架けられたイエス様に対して、どんな言葉をかけるのかは、私たちの人生にとって、また私たちの死にとって、決定的な意味を持ちます。「ディスマス」は、最初はイエス様をののしっていました。世間のイエス様に対する評価にただ同調するだけでした。しかし、十字架上でイエス様とともに、わずか数時間過ごす中で、彼はイエス様と向き合い始めるのです。この方はどういう方なのか、この方はなぜ十字架に架からなければならなかったのか、この方はなぜ人の罪の赦しを願うのかなど。その中で、彼のののしりの言葉は、次第に祈りの言葉へと変えられていくのです。そして最終的に、「あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます」という言葉を聞くのです。

私たちは、死を迎える前に、ぜひ真剣にイエス様と向き合っていただきたいと思います。世間のイエス様に対する評価に流されるのではなく、イエスとは一体どういう方なのか、なぜ十字架に架からなければならなかったのかを真剣に考えていただきたいと思います。なぜなら、十字架に架けられたイエスという人をどう見るかが、私たちの人生と死にとって、決定的な意味を持つからです。

天におられる私たちの父なる神様。

今日は、先に天に召された兄弟姉妹を覚えて、礼拝をささげております。彼らは今、イエス様とともに「天国」におられ、「パラダイス」におられるのでしょう。私たち人間にとって、イエス様とともにいることが何よりも幸いです。イエス様とともにいることこそ「救い」であり、イエス様とともにいることこそ「いのち」だからです。

どうか私たち一人ひとりが、死を迎える前に、イエス様という方と真剣に向き合うことができますように。この方がどういう方であり、この方がなぜ十字架で死ななければならなかったのかを真剣に問うことができますように。そしてどうか、私たちの生涯の最後の言葉が、イエス様、あなたへの祈りの言葉でありますように。

この祈りを、私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。